

私の視点×3

Opinion

若手研究者が見た東アジア統合

早稲田大助教

かつまた ひろし
勝間田 弘



—安藤由華撮影

主導はASEAN 忘れるな

日本を含めた東アジアの地域統合は、ASEAN（東南アジア諸国連合）のような形で進むと思います。私は「今日のASEANは未来の東アジア」と言っています。どう考えても、EU（欧州連合）のような通貨統合とか共通の外交政策とか、主権の統合とかそういうものは出来ない。もっとゆるい、でも「東南アジア」といえばASEAN」と言われるような、ある種のかたまりが東アジアにも生まれていくでしょう。

ASEAN加盟国はインドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ、ブルネイ、ベトナム、ラオス、ミャンマー（ビルマ）、カンボジアの10カ国です。よく会議を開いていますが、ASEANって何をやっているのかと聞かれたら、多くの人は知らないでしょう。実際、たいしたことやっていないんです。

でもASEANができたおかげで、この地域の人たちは「我々は東南アジア人だ」と自覚するようになりました。地域のアイデンティティーが生まれ、シンボルになった。東南アジアといえばASEAN、ASEANといえば東南アジア。これが大きな特徴です。

発足は1967年です。これ以前は領土問題などで国家間の小競り合いや武力衝突がしばしばあったのですが、発足後はヒタリとなくなりました。ASEANは地域平和の基礎にもなっています。未来の東アジア地域統合、あるいは東アジア共同体のイメージです。

何十年前にはASEANと日本・韓国・中国を一つのまとまりに見るなどというの、ほとんど考えられなかったでしょう。それが今、「ASEANプラス3」として機能し、東アジアの地域統合として論じられるようになってきました。

私は東アジア地域統合あるいは東アジア共同体というのは、アジアを見ていてもわからない、その外を見ないとわからない、と考えています。それがEUとの大きな違いです。ヨーロッパ統合は第2次大戦の反省から、内部から進んできました。しかしアジアは違います。かつては冷戦であり、その後はグローバル化の進展、そして北米やヨーロッパでの自由貿易協定など、域外の動きに対する防衛型・対応型として、地域統合や共同体の構想が出てきました。内発的ではないのです。

日本も防衛型・対応型ですね。では、進行中の東アジア地域統合に、日本はどう対応するべきか。地域統合の流れに乗り遅れるなという思いはあるでしょうが、より重要な関心事は、中国とASEANが日本よりも先に接近してしまふことでしょう。しかし、ASEANの取り込みで中国とむやみに競争するよりは、まず中国と仲良くする、戦略的互恵関係を堅固にすることが国益上、絶対です。もちろん韓国も同様です。

東アジアの地域統合を考えた場合、実はリードしているのはASEANです。ここを間違えないでください。これは昨日今日始まったことではなく、数十年の時間をかけて、ASEAN地域フォーラムとかASEAN拡大外相会議といった枠組みを作り、継続し、東アジアの統治の構造を作り上げてきました。ASEANの「プラス3」としてあとから現れた日本や中国が勝手なふるまいで覆そうとしても、そう簡単には変わりません。むしろ国際的な規範に沿わないとしてアジアの一員としての正統性を失う恐れがあります。

私たちが「東アジア人」という意識を持つ日は来るかどうか。ASEANでわかるように、地域の自己認識は政府が主導できます。各国と協働して東アジア地域統合をめざすなかで、時間をかけて形成されていくと思います。

◇

70年生まれ。英バーミンガム大で博士号。シンガポール南洋工科大勤務を経て現職。シンガポールのテレビ局でコメンテーターも。専門はアジア太平洋地域協力。